



校歌に歌われている

「ふるさとの景色」②

～高瀬山の自然と歴史に触れて～

今回は、校歌「春の章」に歌われている故郷の山・高瀬山を紹介したいと思います。

まず、高瀬山の名前の由来は、次のように伝えられています。

神代の時代、宇屋谷にある神代神社の祭神・宇夜都弁命（うやつべのみこと）という女神がこの地を治め、この山に度々お登りになりました。そして頂上近くに湧き出る清水で渴いたのを潤され、「なんとおいしい高清水よ。」と喜ばれました。よってこの山を「高清水山（たかしみずやま）」と呼ぶようになりましたが、時代の移り変わりとともに由来も次第に忘れられ、いつからか「高瀬山」と呼ばれるようになったと言うことです。

戦国時代には、尼子十旗のひとつに数えられた米原広綱・綱寛親子の居城となりました。この時代の中国地方は、大内氏・毛利氏・尼子氏による覇権争いの戦乱が続きます。その時代を生きた高瀬城主の米原氏の物語が荘原地区には残っています。

高瀬山の麓の学頭地区・綿田原に諏訪神社（学頭宮）があります。この神社の祭神は健御名方命（タケミナカタノミコト）で、天文8年（1539）造立の棟札があり、古老によれば、高瀬城主米原氏の建立であるとされています。（『雲陽誌』の学頭に記載）歴史年表に当てはめてみると、尼子氏の勢力が強い時期であり、米原氏の隆盛期ともいえる時代であったようです。

高瀬山の登山口は、宇屋谷の南部広域農道に「高瀬城址」の看板が設置されています。西側の神庭谷からの登山道もあります。その途中には、当時の三の丸（鉄砲立て）・二の丸・甲の丸（頂上）があった場所に表示板が設置されていますが、現在では平坦地をわずかに残すだけとなっています。頂上からは、斐川平野が一望されるとともに、南には赤川の流れと加茂の街並みをはっきりと確認できます。出雲・雲南地方の動きが一目で確認できる要所に位置しています。

ぜひみなさんも、季節のよい時期に高瀬山に登ってみられ、戦国時代の米原氏が眺めたふるさとの風景をご覧になったらどうでしょうか。40分程度の道のりです。

西暦(和暦)	主な出来事
1523年 (大永3年)	毛利元就が吉田郡山城主となる
1541年 (天文10年)	尼子晴久軍3万が吉田郡山城を攻める。米原綱寛も参戦する。大内氏の援軍を得て毛利元就が守りきる
1542年 (天文11年)	大内義隆の軍に従った毛利元就は、尼子晴久の月山富田城を攻めるが敗退する。
1562年 (永禄5年)	米原綱寛は出雲に進攻してきた毛利軍に下る
1566年 (永禄9年)	毛利軍が、月山富田城の尼子義久を攻め、尼子氏を滅亡させる。この時の米原氏は毛利方につき参戦。
1569年 (永禄12年)	尼子の残党山中鹿之助が、尼子勝久を擁し出雲・伯耆国を奪回。綱寛は高瀬城に籠もり尼子側として参戦。
1570年 (元亀元年)	布部山の戦いで、毛利軍が尼子勝久を破り、出雲・伯耆国を奪還する米原綱寛は、高瀬山に籠って毛利軍と対戦する。
1571年 (元亀2年)	毛利軍の総攻撃により高瀬城が落城。綱寛は松江へ逃れ、再び毛利軍と戦う。



【▲ 宇屋谷からの高瀬山の雄姿】